



Title	サントゥール演奏と舞踊にみるイラン古典音楽と身体表現
Author(s)	サレヒ（ジェイ） , メヌシュ
Citation	大阪大学人文学林シンポジウム グレゴリー・ケズナ ジャットの芥川賞候補作を学際的に読む. 2026, p. 9
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/105163
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

サントゥール演奏と舞踊にみるイラン古典音楽と身体表現

サレヒ（ジェイ）・メヌシュ

今回の式典では、イラン古典音楽と舞踊という、私にとって深い意味をもつ二つの表現を紹介する機会をいただいた。日本の日常生活では触れる機会の少ない芸術だが、その音や動きには、私が育った地域の記憶や感性が静かに息づいている。本稿では、演奏者 Saito Tsukimi さんによるサントゥール演奏、そして、筆者が担当したイラン古典舞踊およびイラン・コンテンポラリーダンスについて概要を述べたい。

まず、サントゥールはイランを代表する撥弦楽器であり、台形の木製共鳴箱に張られた多数の金属弦を、細い二本のバチ（メズラブ）で打って演奏することで、独特の響きを生み出す。その音色はきわめて繊細で透明度が高く、軽やかに空間を満たす光のような性質を持つ。サントゥールは歴史が極めて古く、サーサーン朝（226 年－651 年）の宮廷で演奏されていたとの説もあり、西アジアからインドへ広がる中で多様な発展を遂げて現在に至っている。

今回 Tsukimi さんが演奏した曲は「Reng（レング）」と「Chahar mezbab（チャハールメズラブ）」である。「Reng」は 6 分の 8 拍子の舞曲形式で、明快なリズムと反復句を特徴とし、サントゥールの連打が躍動感を一層強調する。「Chahar mezbab」は技巧的な器楽形式で、明確なリズムパターンの上に主題、変奏、速いパッセージが構成され、サントゥールの細やかな打弦がその構造美を鮮やかに描き出す。

私はこの音楽に合わせて、イラン古典舞踊（Classical Iranian Dance）とイラン・コンテンポラリーダンス（Persian Contemporary Dance）を披露した。

イラン古典舞踊は宮廷文化の中で発展した舞踊であり、日本ではまだ紹介例が多くない。最大の特徴は「腕と手の動き」を中心とする点で、指先から肘へと続く流動的な運動が、静かでありながら豊かな感情表現を可能にする。跳躍を多用する舞踊とは異なり、内面の感情を繊細に掬い上げるような動きが重視される。また、6 分の 8 拍子のリズムや反復する旋回動作、長いドレスの裾がつくり出す視覚的効果も特徴的である。

一方、イラン・コンテンポラリーダンスは、古典舞踊に基づきながら現代的な音楽や身体表現を取り入れた舞踊である。動作の基盤は古典舞踊と共通し、手や腕のしなやかな動き、回転を多く用いる点も似ているが、より切れのあるブローケンな動きが加わることで、現代的な表現の幅が広がっている。古典舞踊が伝統音楽で踊られるのに対し、コンテンポラリーダンスは主に現代のイラン音楽に合わせて踊られる点にも違いがある。

大阪大学で、またイランに関連するセミナーでこれらの舞踊を紹介できたことは、私にとって貴重な経験であった。文化とは歴史や知識だけでなく、人々の感性や日常が反映された生きた表現であり、それは実際の音や動きを通してこそ伝わるものである。今回のパフォーマンスが、多様で奥深いイラン文化の側面に触れていただく一助となれば幸いである。最後に、本発表の機会を与えてくださったガデミ・アミン先生をはじめとする関係者の方々に、心より感謝申し上げます。